

群 集 事 始 め

鈴 木 時 夫

T. Suzuki: Erinnerung des ersten Erscheinens vom Wort und Begriffs
der "Pflanzenassoziation" in Japan.

ま え が き

私は群集に定義が与えられたブリュッセルにおける第2回国際植物学会議の翌年に生まれ、群集が標徴種と識別種とによってきめられるということが議決された第6回のアムステルダムにおける国際植物学会議の前年に大学を卒業した。このころ、国有林の植生調査がはじまり、満洲事変を端とする第2次世界大戦の動乱期に研究生生活に入った。卒業から応召まで植生調査の外業と採集品の整理にあけくれ、停年の春、国際植生学会の日本巡検旅行をむかえた。ふりかえって群集を語ろうと思う。

群集はAssoziation(英 Association)にあてられた日本語で、もと群叢といていた。高野山で館脇先生が群種はどうだろうといわれたこともある。動物学では群集をGesellschaft(英 Community)にあてているので、植物学ではPflanzengesellschaftは植物群落であるから、少しニュアンスがちがう。群落ということばをはじめ三好先生はVegetationに対して用いられたそうであるが、その後、VegetationとGesellschaftを区別する必要ができて、群落はVegetationでなく、Pflanzengesellschaftにあてられるようになったという。これは日比野先生の講義の余談にうかがったことで、私の時代以前のことである。これについての文献も知らない。

群落と植生とは、どちらも植物の生活集団であるという点では同じである。河田杰先生は、「植生とはもう、それ自身そのままの表現で、これ以上説明することはむずかしいが、強いていえば植物のしげりあいということであると説明しているが、わからなかった。中野先生はVegetationとはPflanzendecke、つまり地球をおおう植物ということである。」と説明された。その時はドイツ語もならない、植物採集や植生調査も経験した後であったのでわかった。それが植被ということばを使った。林学科の教室に勤めるようになってから植生にした。館脇先生は植生は植物の生理という意味になってまずいといわれた。たしか肥科学で栄養生理の方面で、元素が植物の根の発育をよくするとか、葉緑素の生成に関係するとかいうことを植生に対する影響といていたように思う。この意味は植物の生活集団とは無関係であるから、吉井先生が植群ということばをつかわれるのも、その辺に理由があるのだろうか。これらは皆、私が考えただけである。今は栄養生理的な意味に混同される心配のない位植生が植物の生活集団をあらわす集合名詞であることが普及した。それでも「植生というのは何ですか。」と、大学の学生、官庁では部課長から長官まで、人に聞くそうであ

る。河田先生が、もう一步進めて、森林や草原には多くの植物がしげりあっている。これをまとめて森林植物、草原植物という。マツ林にはマツばかりでなく、他の樹木もまじっているし、下草もはえている。ススキの草原にもハギはまじり、地面に接してシバスゲやシラヤマギクのロゼットもはえている。マツ林を伐採すれば、一しよにはえたツツジやサルトリイバラにも影響があるし、ススキ草原をゴルフ場に利用するか、放牧地とするかは、シラヤマギクやハギにも関係する。マツとツツジの間にはマツとマツグミ、マツとマツタケのような寄生関係でなく、大食堂にそれぞれあつまって会合している人々のように直接の関係はないが、その食堂の食事によって同じように満足し、また同じように食中毒の危険を分担する。毎日同じように食事ができるということで同じ時間にあつまって食事をする。隣人同士直接無関係であるが、袖ふれあうも他生の縁となり、商談が成立したり、友情が芽生えたりすることもある。同じところの土から栄養や水の供給をうけ、おたがい影響しあいながら、日光や空気を利用して生活している植物たちも、これと似た共存関係にある。その全体を植生という。と説明して下さったら、直接講演をきかないで、パンフレットをよむものにも、よくわかったと思う。直接実物から体得できる概念と、言葉や文章でつたえる場合とは、そのものがむしろ無形の意味の方がやさしく、具体的な実在である方が困難である。群落は生活形なり、種類組成で一つのまとまったものとして考えられているものに対して、植生は必ずしもまとまりを必要としない全地域上、全ユーラシア大陸の植生といった内容の複雑なものでも、一つの森林の一部数メートル四方に区画された一部でも、一本の木に着生する数10平方センチの部分でも植生である。まとまりを考えている群落は、一つ、二つと数えることができるし、大小の比較もできる。一つの群落ということがいえるから複数もある。植生は集合名詞だから元来複数にしたい。しかし用例はある。その場合は植生という本来の意味でなく、植生の型という類似化がおこなわれ、考えられているのは実は群落なのである。

私は群落ということばをPflanzengesellschaftにあてることを避けて植物社会といている。それは生態学以外の分野、一般の用語、天然記念物などで群落を同種植物の密生した集団という意味に解釈されているからである。宮沢文吾先生と一しよに大分県天然記念物の文化財保護委員をしていた時、会議で祖母山のアケボノツツジが問題となった。祖母山のアケボノツツジ群落となりそうになったので、アケボノツツジを天然記念物とすることに異議はないが、群落ということばは生態学では大切なことばであるから、乱用を避けたいと申出たところ、承認されて祖母山のアケボノツツジを自生状態で保護するということにきまった。次に大船山のミヤマキリシマとなり、宮沢先生は満山これ紅の風景を思い浮かべて、「これこそ群落だ。」といわれた。群落というものは同種植物の密生した集団と考えている宮沢先生は、私が祖母山のアケボノツツジの密度が必ずしも群落というに足りない解釈されていたようだ。年長者に講義してはじまらない。私はそれ以上何もいわなかった。この時以来、むしろ、こちらですでに一般化した意味に群落というをゆずった方がよいと考えるようになった。

いつか新聞記事に、自然保護に関心の深い天皇陛下が、ここではこの植物をとると折角の風致をこわす。群落をつくっているところでとりましょう。といわれたということがでていた。たとえ1本の植物も自然環境では、他の植物と共に群落をつくっているわけで、この場合も、その種が集団的に密生している状態において、1株をとり、1枝を切ることはむしろ間引の効果があって保護の目的にかなうことを意味している。

植物社会という植物学者から多少反発がある。植物の生活集団のように、社会意識もなく、社会体制のないものに社会ということは問題だということらしい。これは人間中心の考え方で同意しがたい。動物と植物は同一の祖先から別の方向に発達したものの、もともと生物としては同じものであった。行動的な動物では、中枢神経、感覚器官、運動器官、運動神経が発達する。独立栄養をいとなんで定住的生活に進んだのが植物である。動物的生活では本能や知能を通じて個体間に進化と共に同種意識が生まれ、無脊椎動物でも、脊椎動物でも同種社会の形成にむかって進化していった。そして、同種個体間に社会的機能が分化していった。植物では感覚や神経という作用が発達しなかったため、共存体は同一生活資源を有効に利用するために、生活要求のちがう異種個体群からできるようになる。同一面積に投下される太陽エネルギーは一定であるから、単一の階層では、生活できる植物量は制限される。阿蘇の草原ではススキの階層が上に、ネザサの階層が下に発達する。日向灘の砂丘にはクロマツと常緑広葉樹が重なって海外林をつくっている。クロマツの根は深く、常緑広葉樹は横に根をはって砂丘の土を定養する。もしクロマツが虫害にかかって枯れると、常緑広葉樹だけでは強風のために倒れてしまう。常緑広葉樹の下ではクロマツの更新はできないから、海外林は自然に崩壊しては、またクロマツ期から再生する。冬、強風にさらされる立山の高山では樹枝状地衣と小低木が共存している。小低木は密生すると風に強いが、それでも強い風が凍結した地面ごと植生をかきむしって孔があく、こうした孔には夏に有茎半地中植物が侵入し、また樹枝状地衣の無性的な分散体による定住がおこなわれる。そしてふさがれた孔に横から小低木が侵入し、これをくりかえしてコメバツガザクラ・ミネズオウ群集のトウヤクリンドウ亜群集が永久植物社会として存続していく。ハナゴナだけ、トウヤクリンドウだけ、コメバツガザクラだけでは群集は維持できない。こうして助けあっている植物同士であるが、一定面積に養われる植物量に限りがある。地球と人間との間と少しもかわらない。社会と共同体という別の用語で区別する必要はない。人間だけが社会生活をして、他の動物にも似たものがあるが、植物のような下等な生物には共同体はあっても社会生活はないといった人間中心の考え方よりも、生物は単独では生活できない。意識的にせよ、無意識的にせよ、限られた資源を有効に利用して永久に存続しようとしている。人間社会もその一部に過ぎないと考えた方が、謙虚で人間自身のためでもある。東欧諸国でいわれている植物集団学Phytocoenologieということばは植物社会学Pflanzensoziologieの同意義に他ならない。と私は主張したい。

どこかで群集のもとになった群叢ということばがはじめて文献上にあらわれたのは、長野県木曾御嶽の植生についての小泉源一先生の論文で、1916年のことである。Assoziation の定義が国際会議できめられた1910年以後のことであるから植物生態学の講義では、このことばが使われていたかもしれない。1980年高農8年の夏、九州一周植物旅行の出発にあたって、文献をよんでいきなさいといって中村正雄先生から渡された一つが、この論文ののっている植物学雑誌28巻であった。私はこの時、でたばかりの岩波生物学講座の植物群落とその遷移をみて群叢ということばを知り、大へん大切だが、いろいろむずかしい問題がからんでいることばだとおもったが、それが十数年前、小学校に入学した年すでに日本の植物に対してつかわれているのにおどろいた。小泉先生は高山植物や森林の群叢をいくつかあげて居られるが、植生調査をしてその結果をまとめて比較認知したものではない。眼前に群生している状態に対して用いられたもので、どちらかということBestand にびったりくる使用法である。

単群集(群集個体) Einzelbestand (Assoziationsindividuum) は現実に人が眼でみて、直接に調査、測定の対象となることができるから具体的なもの、多くの同種または異種の単群集を観察してから、全く同じ単群集は二つとないが、その間に種組成の同じもの、ちがったものを判別して群集がさまる。これを、ただ経験的にやっただけで先入観にとらわれたり、局部的変化に止まったりして、時には「ぬえ」のような群集をつかむこともあろう。組成表はそれを系統的にすすめる道をひらいた。単群集から群集を認知する道すじは抽象化 abstouieren であるので、群集は抽象的なものといわれる。しかし群集は自然の实在であって、人間の思索の産物ではない。群集は自然を離れて存在しない。人間が群集ということを考える以前から存在していたものである。

Ellenberg は直接研究対象となるのは単群集であって群集ではない。といているが、私はこれに賛成できない。なるほど、単群集の測定を合成的性質によって抽象し、群集を認知する過程は抽象化である。多くの広い地域ならばっている単群集を、人は頭でつかむ (begreifen) のであるが、これを物理的に区画 (begrenzen) できるものである。これをそ実質である。単群集は対象である群集の標本である。医者は患者1人1人を治療する。しかし彼は人間の病気をなおすためにはたらいっているので、偶然に何某という患者が診療をうけたまでである。病徴や経過は個々の患者によってちがう。同じ薬をのんでも効果は人によってちがう、手術後の回復にも遅速がある。1962年の在外研究の際、この点について Braun-Blanquet と Tüxen について質問するのが大目的であったが、遂に真意を伝えることができなかった。残念である。もし Du Rietz に会うことができていたら、目的を果たし得たかも知れない。私はこの碩学のウブサラへの招待をごとわって奥黒部の調査に急行したのであった。

群 集 と 群 落

植物の生活集団にまとまりを考えた時、群落という。群落 Gesellschaft は普通名詞であるか

ら、植生と軍勢にたとえれば、群落は部隊である。部隊には編制があつて、小隊は大隊へ大隊は連隊へ連隊は諸兵種連合の師団へとまとまっていく。群落も集団がいくつか集つて群団に、群団がいくつかあつまつてオールドへ、オールドはクラスへとまとまっていく。どの程度のものも群集とし、群団とするかは、特にきまつていないが、組成の質的なちがいで区別できるいちばん基本的な植生単位が群集であるといつてよい。質的というとはっきりいえば種のあるなしである。しかし量的のちがひも程度があつて、はっきりした量的なちがひは質的なちがひとなり、反対に群集の中に偶生種がとびこんでいても、何ら質的なちがひとみなされない。亜群集、変群集といった群集の下位単位は固有の標徴種をもたない。群集はそれをもつ。といつても、比較の範囲をひろげると必ずしも固有とならないこともあるし、地域をせばめてみると固有ということがめだってくる。群集はそういう質的な組成差の最低次の単位であるから、九州とか関東とか一地方に限つた時は、はっきり標徴種となるものも、日本全体、東アジア全体とひろげていくと、その関係が変つてくる。ヤブコウジは関東では、スダシイ・ヤブコウジ群集のよい標徴種であるが、神戸の六甲山では、ヤブコウジはアカマツ・モチツツジ群集の方にむすびつくことがある。九州では白杵辺で、ヤブコウジはアカマツ・ヤマツツジ群集にむすびつき、隣接するスダシイ林にむすびつかなくなる。尾久島はスダシイ・ヤブコウジ群集は存在しないが、ヤブコウジの変種、ボシバヤブコウジは、スダシイ群団から離れてヤクシマ・ヤダケ群団に従属している。地球の歴史の中で気候のような環境がかわるから、植物も南北、東西、上下に移動し、共存のあいでもえらんで群集をつくるから、こういうことになる。しかし群団となると、質的組成が確立してくる。群団以上になると、また種と段階で組成の特徴がでにくくなり、属、亜属、節といった分類群の階級のもっと高次のもののむすびつきによって、はっきりときまる植生単位といふことができるのではないが。

群落には包摂関係で階級づけられた単位がある。群集は質的組成の特徴で区別されるいちばん低次の植生単位である。群集と分群集

もとヨーロッパでは中部ヨーロッパのスイス、ドイツ、フランスなどの国の北部ヨーロッパのウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ロシア、などで群集の基準がちがつていた。北部ヨーロッパは植生が単調であるため細かい組成的特徴が問題となり、それも量的特徴を加味して最低次の植生単位をきめようとして群集が細くなる。中部ヨーロッパでは複雑な組成の高山草原を対象とするので、植生単位をより大づかみにしようとするのが原因とされている。しかし、この区別は今日ほとんどなくなった。まだソ連の論文に昔の考えで細かい群集をつかつてのものがあつた。一時大群集、小群集などといわれたこともあつた。Du Rietz は1930年に論文を書き、北部ヨーロッパの意味の群集を Soziation として区別し、Assoziation を中部ヨーロッパの意味につかうように譲つた。しかし彼は植生単位を分類群にうつしていえば、Soziation は種、Assoziation は属に相当するといっているから、彼は名称だけは譲つたが考え方は捨てたわけではなかつた。

た。中野先生はこれに基群叢ということばをあてた。群叢を群集としたとき、基群集ということばを一時つかってみたことがあった。しかし、植生単位に最低次、これ以上わけることのできないというものをとめることは困難であるというので評判が悪かった。Assoziationと Soziationは包括するものと、されるものの関係をあらわすだけで足りるとおもってSoziationを分群集とした。

Du RietzはSoziationを具体的なものといった。しかし単群集の具体的なものという意味とはちがう。Du Rietzは植生単位は人間の思案の中にある型ではなくて自然に実体しているものであるというために具体的といったのである。ただDu Rietzの1980年ころ提唱した単層植物社会は、結局階層をいくつみとめるべきかという問題になり、こまかくわけていくと1種1種別々になり、これをまた年令別などでわけたならば際限のない林分構造論になって種類の多い台湾の山の森林などはどうしても、ある程度大づかみにしないわけにいかない。それで4階層か、5階層みとめて、各階層の優占種になれる種をあげて、可能のくみあわせをつくってみると、おそろしい数になる。これをかたっぱしから実在したものを記載していくことは館脇先生はこころみられているが私は群集や亜群集に典型的にあらわれてくるものを付記し、または何か測量をおこなった林分について調査するだけでよいと思う。また調査数が群集を認知するための最少数位では、この意味の分群集は普通1回しかでてこないが、同じ優占種のくみあわせにも、優占種以外の種が変化し、量的関係のちがいがあから、これによって分群集の抽象化はおこなわれる。全種類の一致、種別階層とみとめれば分群集は単群集と一致し、群集の全体を調査記載することになる。原生林がしだいに少くなると、こういうことも必要になるかも知れないが、そうならないことをいのる。

吉岡邦二氏はアカマツ林で、上記の意味の分群集を群、これをいくつかまとめたものを群型とし、群型は記載的価値があると考えているようである。

分群集は前記の意味を少しまとめた意味で、中野治房先生の草原の研究、堀川芳雄と故佐々木好之氏の芸北地方の森林で用いられている。この意味の分群集は吉岡邦二氏の群型に近くなる可能性がある。

分群集の命名

1980年ころに出版された岩波生物学講座は、それまで象牙の塔の奥深く閉されていた生物学のすがたを一般に公開した意味で一時代を画するものであった。それまでも、三好学先生の最新植物学講義とか池野成一郎先生の植物系統学、ローマ字のZikken-idengakuなどよい本がでていたが、牧野植物図鑑や日本植物総覧のような本も盛んにつかわれていたが、新しく発展しつつある分野とか、どこの大学にはどういう学者がいて何を研究しているということは植物学雑誌を通じ知る以外に方法はなかった。宇都宮高等農林学校で、香川先生の研究室に残った私たちを指導して下さった先輩の知崎氏は、そういう学会消息にくわしく、私たちは喜んでこの先輩の話をきいたものだった。だから、岩波生物学講座がでると争って読んだ。しかし、私は金まわりが悪かったから自分

では買わず、友人の伊藤春夫氏や1級下だった北村英一氏から借りて読んだ。友人の須藤千春氏ももっていたが、興味をもつ方面が同じなのでやたらに貸してもらうわけにいなかった。

このころ、中野治房先生は植物学雑誌の雑録欄に、ヨーロッパの生態学をのせられて、地方にいるわれわれを啓発して下さった。中野先生は群集は単に組成だけできまるものでなく、それが成立する環境、環境に対するその群集独自の反作用などが大切な要素であると考えて居られたようである。だから、先生はむしろ1910年のブリュッセル会議の群集の定義の方が1935年のアムステルダム会議で議決された標徴種重視の定義よりも優れているという意見であったのではあるまいか。雑録の中で1935年のアムステルダム会議では推移学説に基づいてアメリカ、イギリスの学者が反対したが、遂に中部ヨーロッパの学派の意味の群集が大多数の賛成で定められたことを紹介して、この決定は環境を重視する研究者にとって一沫の淋しさを感じさせるとなげかれた。ところが、私がモンペリエにブラウン・ブランケ先生を訪れた時、「人は生態、生態といって、組成を軽視する」となげいて居られた。この辺がリュールとの不和の原因であったかも知れない。野外で植生に接していると、群集の組成の重要さは、ひしひしと感じる。はじめに理論をうち立てておいて裏付けをとるためなら、チャート・コドラートもトランゼクトも結構であるが、自然から謙虚に法則を学びとっていくにはブラウン・ブランケの方法しかない。台湾の原生林を歩いて、伐採による推移の研究をやってみた。方眼方形区もやってみた。しかし自然はあまりにも大きく、おのれはあまりにも小さい。カタツムリのように、できるだけの器材を背負っていても、環境のすべてもとらえることはできない。工業研究所に週2回行って土を分析してみても、イオンの反応がなくなるまで水であらううちに何週間もたって珪ばん比の分析が片づかないうちにとうとう召集令状が来てしまった。何とかして実験室をつくらなければとやっと実験室ができると、ひまがない。とうとう病気になり、やっと停年になってひまができたころには、からだは動かず実験室は返さなければならなくなった。1935年の議決はまことに植生研究のためにはやむを得ないものである。とはいっても、生態にめくらで群集ばかり沢山記載するとすれば邪道である。植生研究はやはり生態学の一部である。

岩波生物学講座の植物群落とその遷移にでている群集の和名をみると「ぶな・すずたけ群叢」がある。後に正宗先生は植物地理学の中で、この名称をいく分広義に、私の植生類型でいうとブナ＝ササ型森林の意味に使うことを提唱した。ブナ＝スズタケ群集は出版物としてあまり適当でないが、東京営林局の技術研究の1号に戸中山国有林の調査で組成表をつけて発表し、東亜の森林植生にも引用した。佐々木好之博士は群団名に採用しているが、命名上の階級をかえる場合に、タイプを消してしまっはいけない。戸中山のブナ林をふくむ群集にブナ＝スズタケ群集をのこしておかなければいけない。私は佐々木博士のVegetationに出した論文を紹介しようと思ったが遂に博士の生前にやれなかった。その理由は、病床にある博士に、この苦言を申し述べることができなかったからである。しかし、この私情にとらわれた私の態度こそ手本にはならない。Vegetationの論

文は佐々木博士のヨーロッパ留学の成果であるが、それまでに彼が抱懐していた主張なり独創性なりが十分生かされていない。佐々木氏の材料で Tüxen の法式でまとめた仕事である。佐々木さんは日本のブナ林で、連続体観と分類体系観との相克になやみ、Meijer Drees の亜群集と変群集の使いわけで一つの解決法を考えた。しかし最後の論文には、この線は出していない。この不満が彼の病気の原因でなかったかと私はおもう。私の直言こそが彼のため良薬であったかも知れない。しかし、当時私もまた病んでいた。今も病み、しかもなお生きている。彼の分まで欲張って生きているのかも知れない。

1980年代に、日本で分類学者が輩出した。私もできそこなつものにならなかったが、その1人であった。そして新種、新名競争のようなこともあった。タンポポとササはその例である。分類のための分類は学問の邪道である。1985年の群集定義が、この邪道のいとぐちになり、日本の植生研究がその愚をあえてすることはあてはならない。

岩波生物学講座には中井猛之進先生が、植物命名規約を書いて居られる。これをみると、植物の分類群（このことばは使っていない。Taxon ということばはもっと後にできた）や植物群落（Pflanzengesellschaft ということばではない別の表現があるが）は正しい名称があるべきであるということが書いてある。私はこれを東京大学の理学部植物学教室で原本について調べていたとき、命名規約に詳しい原教授がみえたので、「この植物群落ということばは植物命名規約からいつ消えたのですか。」とたずねたが、ちょうど1985年ころ、私が命名規約に関心をもたなくなったころ、原さんがこの方面のエキスパートになられたころとはちょうどリレー式であって遂にわからなかった。私はノートもつくったのだが、今でて来ない。1985年ころ、群集の命名の問題が別の分科会で討議されるようになった時、植物命名規約の方からは消えたのであろう。しかし一方において、生態学者の中で植生を研究している人たちの分科会では植生単位命名の国際的とりきめをつくろうという話しあいの分科会がおこなわれている。しかしその結果、植物命名規約のような規約とはならず勧告の形でまとめられている。規約なら守らなければならないが勧告なら守らなくてもよいという人があれば、それは良識をもつものの態度でない。学問上の真理はもちろん多数をもってきめることはできない。しかしながら、命名法のようなものは真理そのものではなくて、それを研究するための足並みをそろえるためのルールであるから勧告されたことは良識をもって守るべきである。その勧告は、ブラウン・ブランケの植物社会学にもものっているし、佐々木好之博士が共立出版の生態学講座・4に植物社会学を編集した中で、石橋昇氏が植物社会のラテン命名法として書いている。私は、J. Moravec (1968) を読んでいないが、1933年5月6日、パリで開かれた準備委員会において、決定された勧告の8カ条があげられている。

1. 植生単位の正当性は完全な群集組成表に標徴種、中核群の記載されたものをそなえるか、または常在度を記入した種名表をそなえること。その例外は委員会の承認を必要とする。

2. 既に記載された群集は、この条件が充足されるまでは仮称とする。そして最初の著者名を、

°()の中に入れ、最初に表をつくった著者名を次に書く。

3. 一般に印刷された研究だけを考慮することとする。

4. 1900年(ふくむ)までの研究までさかのぼることを勧告する。しかし、きわめてはっきりしているものはこの限りでない。

5. 群集の命名には国際植物命名規約に一致する植物名をつかうこと。しかし、委員会は「保留名表」を作成することがある。

6. 将来分類学の名称がかわっても群集名を変更する必要はない。

7. 正当に発表された群集名が複数の群集名をふくむことがわかったならば異名となる。しかし、最初の名称を分割した名称の一つに保留することが望ましい。(改変)

8. 植物社会予察は発表された群集名を切ってはれば、索引カードができるように1面印刷となっている。

この植物社会予察に出た基本的な考えは植物社会学 I (鈴木時夫訳) の 109 ページにもなっている。石橋昇氏の 11, もし植物の学名が変わったときには、その新しい学名が通用するようになるとともに、対応する群落名も変えられるという条項は、植物社会予察の 6 に賛成し、私はこの条項には反対である。種分類学では命名規約の変をさぐって、いたずらに種名を変更しようという努力もなされたことがあるが、これは全く学問の進歩に貢献しない行為で植生研究はこれにまきこまれたくない。12 には大賛成である。なるべく歴史を尊重したい。

以上は群集のラテン名、つまり学名であるが、和名はどうなるだろうか。私たちに日比野先生が植物生態学の講義をされた時、群集の名前はたいがい関係の深い二つの植物の名前を重ねてつけるという二つの例を上げた。一つは中野先生がつけたクロマツ・トベラ群集、もう一つはその時、すでに故人であった日比野先生の同僚で私たちの恩師の工藤先生のクス・カシ群集、この二つであった。クロマツ・トベラ群集はその前年鹿児島島の吹上浜の海岸林をおもい出させた。この名前はたしか植物群落とその遷移の中に写真と共に出ていたとおもったが、さがしてもでて来ない。人間の記憶はあてにならないものだ。クス・カシ群集は台湾の日月潭のまわりのダム建設で水没する運命にあった亜熱帯性の常緑広葉樹で、卒業後私が応召まで研究対象として親しんだ村であるが、とても *Assoziation* といったものでなく、私はこれをクラス群名に保留している。このタイプ群集は残念ながらダム建設のため水没してしまった。しかしまださがせば水社付近に同じ群集があるかも知れない。この二つの例は期せずして、二つの非常にちがった例をひろったことになる。クロマツ・トベラ群集は高木層の優占種と、その下によく生育する低木層の種をくみあわせたもので、クロマツ・トベラ基群集というものもあるらしい。これに反してクスとカシは種ではなくて、クスというのは常緑のクスノキ科植物を、カシというのは常緑のブナ科植物をあらわしている。そしてクロマツとトベラはちがった階層の優占種で、クロマツは常に上の層、トベラはその下の層に生育する。クスとカシはほとんど同一階層に生育するから、常に優占度からみて、どちらかが優位で、台

湾のオオバタブで群団ではクスが優占、タコサゴシイ群団ではカシが優位で、クスはニオイタブ、ランダイニッケ、ナントウダモ（バリバリノキ）などがこれに伴うのである。クスノキ科が優占種のときはブナ科の常緑樹が混生することはまれ例である。植物目録を地域的に作成して、（おそらくいくつかの群集にわたり）、種の多い科によって命名したものである。だからカシ・クスといってもよいのだが、きっとクスノキ科の方が種数が多かったのであろう。クス・カシ群集の方はその後タブ・シイ群集とか、クリ・コナラ群集などがそのたぐいであって比較的少ない。これに対して森林の上層木と下草で命名した群集の数は実に多い。草原でも、ススキ・トダシバ群集やヨシ・アゼスゲ群集などその筆法である。二つの名前をつなぐときに日本人とヨーロッパ人では習慣がちがう。花川戸助六は日本では花川戸にいる助六親分ということになるが、Hanakawa de Sukeroku というフランス注があるとスケロクのアナカワということになる。鼻で有名なシラノ・ド・ベルジュラックがその筆法である。日本人にはコケモモ・ハイマツ群集やヤブコウジ・スダシイ群集はびったり来ない。しかし高山植生や雑草植生のごとく階層の分化していない群集名はラテン語どおりによむのも便利である。Arcterio-Lobseloirietum をコメバツガザクラ・ミネズオウ群集といって、一向に抵抗はない。いちいちひっくりかえして下から読む必要はない。階層の分化した植生にあっては、和名は上の階層から、分化していない植生ではラテン名の順序でよむとしたらばどうであろうか。歴史的には二つの用法があった。クス・カシの場合、混合すれば必ずブナ科が層の上にくる。しかし、今からカシ・クスとひっくりかえすにはあたらな。語尾もクス・カシの方がよい。皆さんに考えていただいて、今後私たちがいつも使う群集の和名だからびったりと民族の語感にあったよび方にした方が学問も国民に愛され、世の中に役立つであろうと思う。

〔新刊紹介〕 原寛・佐藤邦雄・黒沢幸子共著「軽井沢の植物」井上書店、昭和49年7月1日発行、菊判、原色32頁、全807頁、6,500円

軽井沢の住民である本会会員佐藤氏が若い頃から観察を続けてきた故里の植物を原・黒沢両博士の協力を得てまとめたものである。巻頭は124種の花のカラー写真で飾られており、内容は軽井沢の植物の特色など7項目からなっている。注目すべき植物の項ではウスイハナワラビ・オオイチョウバイカモ・カルイサワカラマツ・アサマフクロ・ヤマナシウマノミツバ・ツルカメバソウ・ヤマタバコ・バルナユキザサその他の珍種について写真・図版・分布図をそえて説明している。また地方植物誌としては検索表に多くの頁を割いている点に特色がある。この書は避暑地軽井沢高原の植物を観察するに大へんよい手引書である。

（H.O生）

群集事始め正誤表

頁	行	誤	正
1	13	Pflanzen ^x gesellschaft	Pflanzen ^o gesellschaft
2	下から 12	" "	" "
	19	したい ^x	しない ^o
	20	類似化 ^x	類型化 ^o
3	6	植物学者 ^x	動物学者 ^o
	16	海外林 ^x	海岸林 ^o
	19	同上 ^x	同上 ^o
4	17	abstou ^{xx} ieren	abstrah ^{oo} ieren
	22	begveifen ^x	begreifen ^o
5	17	あいてもえら ^x んで	あいてもえら ^o んで
6	7	実体 ^x している	実在 ^o している
	14	測量 ^x をおこなった	測定 ^o をおこなった
下から	3	残 ^x った	残 ^o って
9 下から	9	常緑広葉 ^x で	常緑広葉樹 ^{oo} 林
		親しんだ村 ^x	親しんだ林 ^o
10	10	フランス注 ^x	フランス語 ^o
	13	Arcterio- Lobseloirietum ^{xx}	Arcterio- Loiseleurietum ^{oo}
	17	語尾 ^x	語呂 ^o

群集事始め正誤表

頁	行	誤	正
1	13	Pflanzen ^x gesellschaft	Pflanzen ^o gesellschaft
2	下から 12	" "	" "
	19	したい ^x	しない ^o
	20	類似化 ^x	類型化 ^o
3	6	植物学者 ^x	動物学者 ^o
	16	海外林 ^x	海岸林 ^o
	19	同上 ^x	同上 ^o
4	17	abstou ^{xx} ieren	abstrah ^{oo} ieren
	22	begveifen ^x	begreifen ^o
5	17	あいてもえら ^x んで	あいてもえら ^o んで
6	7	実体 ^x している	実在 ^o している
	14	測量 ^x をおこなった	測定 ^o をおこなった
下から	3	残 ^x った	残 ^o って
9 下から	9	常緑広葉 ^x で	常緑広葉樹 ^{oo} 林
		親しんだ村 ^x	親しんだ林 ^o
10	10	フランス注 ^x	フランス語 ^o
	13	Arcterio- Lobseloirietum ^{xx}	Arcterio- Loiseleurietum ^{oo}
	17	語尾 ^x	語呂 ^o